



木嶋は今回、大型画面の作品7点と、11×14cmの葉書サイズの作品28点を出品した。大型の作品はミクストメディア、小型作品はドローイングであり、異なる番号が振られているがタイトルはいずれも《零度》である。

大型作品は近づいて見るとDMなどの葉書が貼り合わされ、その上は幾重にも塗り重ねられている。遠目にみればその貼り合せが恣意的なものではなく、十二分に構成的要素に満ち溢れていることが理解できる。つまり、細部が全体を司り、全体は細部の存在を可能としているのだ。

何故タイトルは《零度》なのか。近づいたり距離をとったりして作品を「眺める」のではなく「感じて」みると、木嶋が意図していることは「振動」と「振幅」ではないかと感じる。画面に固定されるものは何一つ無く、総てが揺れ動いているので、静止するものは「零」と化す。

その動きとはダンスとか舞踏、パフォーマンス的な動作なのではなく、かといって例えば古代の壁画にある絵画であることの最大の特徴、映像の視覚化といった問題でもない。20世紀を超過した我々が立ち会うべきであるヴィジョンがここに具現化されている。

絵画を超越するヴィジョン、それは懇々と流れ行く映画やビデオという動画が携えている特徴なのかも知れない。この要素を備えているにも関わらず木嶋は「描くこと」の魅力の探究と固執に終始する。これこそ、木嶋の画面を強度に支えているのではないだろうか。

描くことに固執する。ドローイングに、木嶋作品のヒントは隠されている。ここには材質や技法が問題にされず、描くことしか存在しないのだ。当たり前のように、中々この純粋な作業は探究できない。描く画家、それが木嶋なのだ。

